

NII News

National Institute of Informatics

No.12
October 2002

平成14年10月

国立情報学研究所ニュース 第12号



CONTENTS

- | | | |
|-------|----|---|
| 特集 | 1 | Papillon 2002 workshop 第3回パピヨンプロジェクト 年次ワークショップ(7月16日~18日)の開催 |
| 研究活動 | 2 | インターネットを用いた準リアルタイムの地球環境データ国際共有システム(国立情報学研究所 北本 朝展)
NII定例研究会 / 第20回<7月17日>
インターネット時代の学術情報発信と日本の英文電子ジャーナル
物理系学術誌の取り組みと課題 (東京大学 五神 真)
「ユビキタスコンピューティング・ネットワークにおける環境適応型パーソナル通信」
(国立情報学研究所 上岡 英史)
ACM SIGIR Workshop on Cross-Language Information Retrieval: Research Roadmap(ACM-SIGIR言語横断検索ワークショップ:研究の道しるべ) / 第7回環太平洋人工知能会議(PRICAI-02) / Computerm 2002: The 2nd International Workshop on Computational Terminologyの開催
HOT NEWS1 汎用連想計算エンジンGETAの公開開始 |
| 大学院教育 | 6 | 総合研究大学院大学数物科学研究科情報学専攻紹介(その1:情報基盤科学) / 総合研究大学院大学国際大学院コース(情報学専攻)に入学者6名 |
| 事業活動 | 8 | ドイツでの目録システム講習会開催 / 「情報セキュリティ担当職員研修」及び「情報セキュリティポリシー入門講座」について
HOT NEWS2 Webcat Plusのサービス開始 |
| トピックス | 9 | 平成14年度軽井沢土曜懇話会(7月27日・9月7日) / 山本喜久客員教授による特別講義 「量子コンピューティングの基礎」 / 名誉教授の称号授与 / 受賞 |
| お知らせ | 11 | 今後の研究会・シンポジウム・行事等の予定 |

Papillon 2002 workshop

第3回 パピヨンプロジェクト 年次ワークショップ(7月16日 ~ 18日)の開催

パピヨンプロジェクト第3回ワークショップは2002年7月16日～18日、東京の国立情報学研究所(NII)にて開催された。パピヨンプロジェクトはNII(日本)とグルノーブルのジョゼフ・フーリエ大学(フランス)機械翻訳研究グループ(GETA)との間で2000年7月より継続している国際共同研究である。本プロジェクトは、(1)多言語語彙ベースの構築、及び(2)コンピュータ言語学分野における科学的研究の発展の2つを目的としている。

本ワークショップの参加者は年々増加しており、2000年に東京で行われた初回は22人、グルノーブルで行われた第2回は32人だったのに対し、今回は41人であった。

日仏をそれぞれ多数の研究所が代表し、フランスからはGETA、LALICC(ソルボンヌ)、LIMSI(オルセー)、LIRMM(モンペリエ)、LORIA(ナンシー)が、日本からはNII、国際電気通信基礎技術研究所(ATR、関西)、NTTコミュニケーション科学基礎研究所(京都)、奈良先端科学技術大学院大学、三菱総合研究所、東京大学、大阪大学、千葉大学、作新学院大学及び島根大学からの参加があった。23の

発表全てがセミナー期間中の3日間に発表された。これらの大半は高度な科学レベルのものであり、現在の世界最高水準のものであった。

組織レベルでは、本プロジェクトは複数の技術委員及び調整委員によって構成され、成長を遂げていると言える。様々な(特に先に示した)研究所による本プロジェクトへの参加を組織し、適用可能言語数を増大させることは必要不可欠である。特にNIIはタイ語及びベトナム語との連携を確立している。GETAはラオ語、マレー語、ベトナム語との連携を確立した。また、在日ドイツ人研究者は彼らの独日辞典を提供する予定である。中国語への展開についても議論された。Monash大学(オーストラリア)のJim Breen教授は、自分の作った英日辞書の使用、及び世界全土での参照を許可した。これらの許可によって、語彙集と辞書における使用ないし使用権利が与えられたことになる。本セッションでは特にフリーソフトのモデルに利用されるフリーライセンスの法的帰属について突っ込んだ議論がされた。

(ソフトウェア研究系分散統合処理研究部門助教授
Frederic Andres)



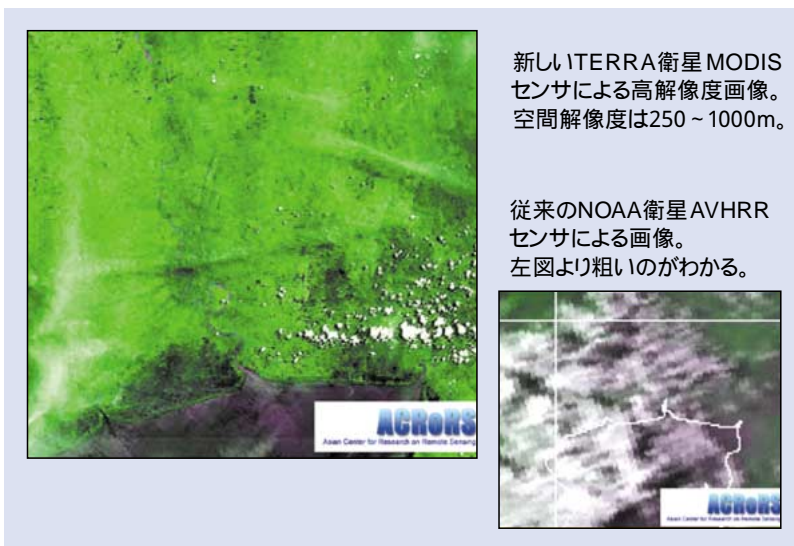
インターネットを用いた準リアルタイムの地球環境データ国際共有システム

宇宙から届く地球観測データの量は近年になって加速度的に増加した。その理由は、以下のような高い機能を備えた地球観測衛星が次々に出現したためである。

1. 高解像度(より細かいものまで見分けられる)
2. 多波長(赤外線など、可視光以外の色々な波長で観測できる)
3. 多頻度(より頻繁に観測できる)

こうして、増大する一方の大規模地球観測データに対して、これをいかに蓄積し、そこから有用な情報を抽出するか、ということが切実な課題となってきた。また地球の全体像を準リアルタイムで把握するために、世界各地で受信された地球観測データをネットワークを用いて迅速に交換し共有するためのシステムも必須となりつつある。

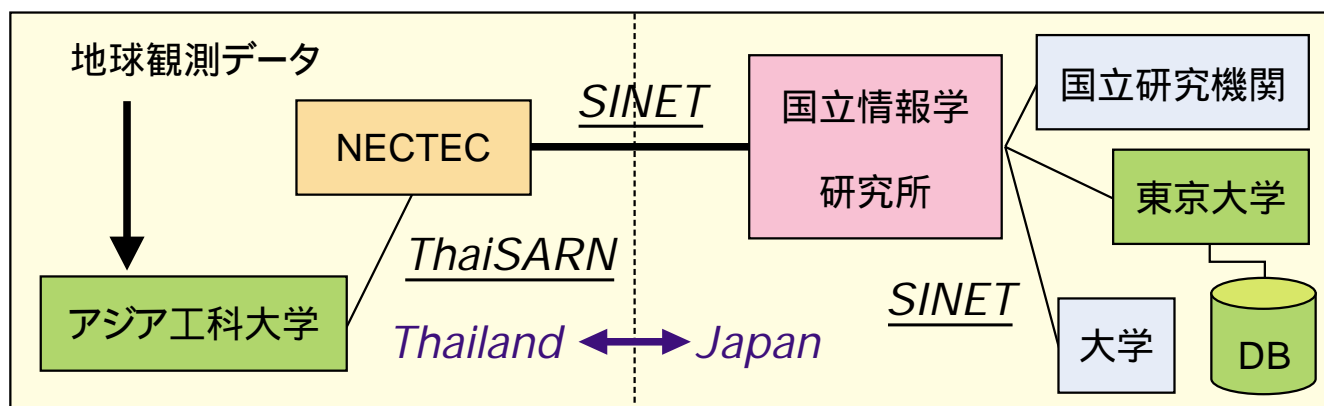
このような問題の解決を目的として、国立情報学研究所では、東京大学生産技術研究所およびアジア工科大学リモートセンシング研究センター(ACRoRS)を中核とする日・タイの共同研究者チームを結成し、これらの研究者が地球観測データ



新しいTERRA衛星MODISセンサによる高解像度画像。空間解像度は250~1000m。

従来のNOAA衛星AVHRRセンサによる画像。左図より粗いのがわかる。

を準リアルタイムで国際的に共有可能な基盤システムの構築を開始した。具体的には、地球観測衛星データの国際ネットワークとして、日本とタイで受信する地球観測衛星TERRAのMODISセンサデータを交換するための国際ネットワーク(下図参照)を開始した。



このネットワークにおいて不可欠の役割を果たしているのが、学術情報ネットワークSINETの国際ネットワークである。この国際ネットワークは、国立情報学研究所とタイのNECTECとを結ぶインターネット回線であり、日・タイ間の学術情報の流通を促進することを目的として、国立情報学研究所が1994年以来運用を続けているものである。このネットワークと両国内の学術ネットワーク(SINET/ThaiSARN)とを結合することで、地球観測データを準リアルタイムで日本・タイの研究者が交換し共有可能なシステムを構築するのが第一段階の目標である。

国立情報学研究所はこれまでのところ、大規模地球環境データ共有システムに必要なネットワーク技術およびデータ処理技術の面で共同研究に貢献している。しかし、実世界から生成される莫大なデータをいかに蓄積しそこから有用な情報を抽出するかという課題は、まさに現代の情報学の中心的

課題であることから、今後は情報学におけるこうした研究の蓄積を活かせる貢献を増やしていく考えである。

一方、東京大学とアジア工科大学では、共有地球観測データをWWW上で公開するシステムが稼働を開始し、一般の地球環境研究者へのデータ提供も始まりつつある。そして将来的には、データ解析に多くの地球環境研究者が携わることにより、森林火災抽出システム、洪水観測システム、地震・火山噴火観測システム、農業収穫量推定システム、漁場発見システム、土地利用状況監視システムなど、現代社会の多様な用途に地球環境データを活用していく計画である。地球環境データが多くの人にとって身近な存在となるよう、今後も研究を進めていきたい。

(実証研究センター実証研究推進室助手 北本朝展)

インターネット時代の学術情報発信と日本の英文電子ジャーナル 物理系学術誌の取り組みと課題



実証研究センター
フルテキストコンテンツ研究室 客員教授
東京大学大学院工学系研究科 教授

五神 真

(ごのかみ まこと)

1980年 東京大学理学部卒業。理学博士。東京大学理学部助手を経て1998年より東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻教授。1998年 学術情報センター開発研究系客員助教授を経て現在実証研究センター客員教授。専門分野は量子エレクトロニクス、物性物理学、量子光学。

学術論文は、研究者にとって研究活動の証でありその出口にあたるものである。近年の電子化により、その姿が急速に変わりつつある。この中で、我が国から刊行されてきた学術誌が転機を迎えている。物理学の分野では、JPSJ(日本物理学会)やJJAP(応用物理学会)といった英文学術誌が長年刊行されてきた。これらは、高温超伝導体や青色発光ダイオードなどの研究など日本が中心となって研究を世界に向けて情報発信する媒体として重要な役割を果たし、国際的トップジャーナルとして認知されている。日本物理学会と応用物理学会は、電子化時代に備えるために、物理系学術誌刊行協会(IPAP)を設立し物理系の英文学術誌を統括して出版する体制を2000年4月にスタートさせた。現在IPAPのもとで4つの英文学術論文が刊行されている。本講演では、この活動を紹介しな

がら、学術出版の課題について論じた。電子化は、欧米の少数の有力雑誌によるトップコンテンツの寡占化に拍車をかけている。日本人による重大な研究成果もその公表の場が国産ジャーナルから海外有力雑誌へと移ってきた。これは日本の研究水準が高まったことも一因であるが、そう単純に喜んではいけない。日本から発祥したオリジナルな研究の多くはこれまで日本の英文誌にその第一報が掲載されてきた。例えば最近話題の青色半導体発光素子の研究において、その立ち上がり時期に多くの重要な論文がJJAP誌に掲載されている。このような新しい研究の流れを作り育てる舞台を世界に向けて提供することが科学技術先進国としての責務である。従って、日本発のトップジャーナルが衰退することは深刻である。学術論文の電子化がもたらしているもう一つの問題として、研究評価の安易な数値化を指摘したい。被引用回数などの数値データをあげること自体が目的化してしまうことは、貴重な才能を凡庸な追従研究に追いやる危険がある。科学技術立国を唱うためには、世界規模での科学技術資産の構築に圧倒的貢献をすることが必須である。その為に、我が国の学術雑誌の強化は必須であろう。

ACM SIGIR Workshop on Cross-Language Information Retrieval : Research Roadmap (ACM-SIGIR言語横断検索ワークショップ:研究の道しるべ)

2002年8月15日に、フィンランドのタンペレで開催された第25回国際ACM情報検索会議(ACM-SIGIR)において、言語横断検索研究(CLIR:Cross-Language Information Retrieval)の現状をレビューし、社会のニーズをふまえて、今後5年間の具体的な研究の方向付けを徹底的に議論するために、主要な評価会議の主催者Fred Gey(TREC-CLIR)、Noriko Kando(NTCIR)、Carol Peters(CLEF)が標記ワークショップを企画しました。

CLIRは、異なる言語で書かれた文書を一括して検索するインターネット環境下では必須の技術です。1996年のACM-SIGIRワークショップで提案され、その後、急速に研究が展開してきました。

今回のワークショップでは、20カ国から多数のCLIR研究者が集まり、18件の発表と集中的な議論が行われ、評価の重要性、音声・画像などマルチメディアCLIR、文書ではなく回答そのものを得る言語横断質問応答、検索結果をわかりやすく提示する方策、適応文書ジャンル拡大の必要性、言語のみならず文化・社会慣習の差違、言語学的資源が少ない言語に関する研究の必要性が提案されました。成果はACM SIGIR Forum誌上で報告するとともに、1年後にInformation Processing and Management誌で論文特集号を予定しています。

(人間・社会情報研究系情報図書館学研究部門助教授
神門典子)

「ユビキタスコンピューティング・ネットワークにおける環境適応型パーソナル通信」



情報メディア研究系
統合メディア処理研究部門 助手

上岡 英史

(かみおか えいじ)

1989年青山学院大学理工学部物理学科卒業、1991年同大学院博士前期課程修了後、シャープ(株)技術本部通信技術研究所入社。1997年青山学院大学大学院博士後期課程修了(博士(理学))後、日本学術振興会特別研究員として宇宙科学研究所気球工学部門勤務。1998年学術情報センターシステム研究系助手を経て、2000年から国立情報学研究所情報メディア研究系助手。現在の専門分野は、ユビキタスコンピューティング・ネットワーク、コンテキストウェア・コンピューティング。

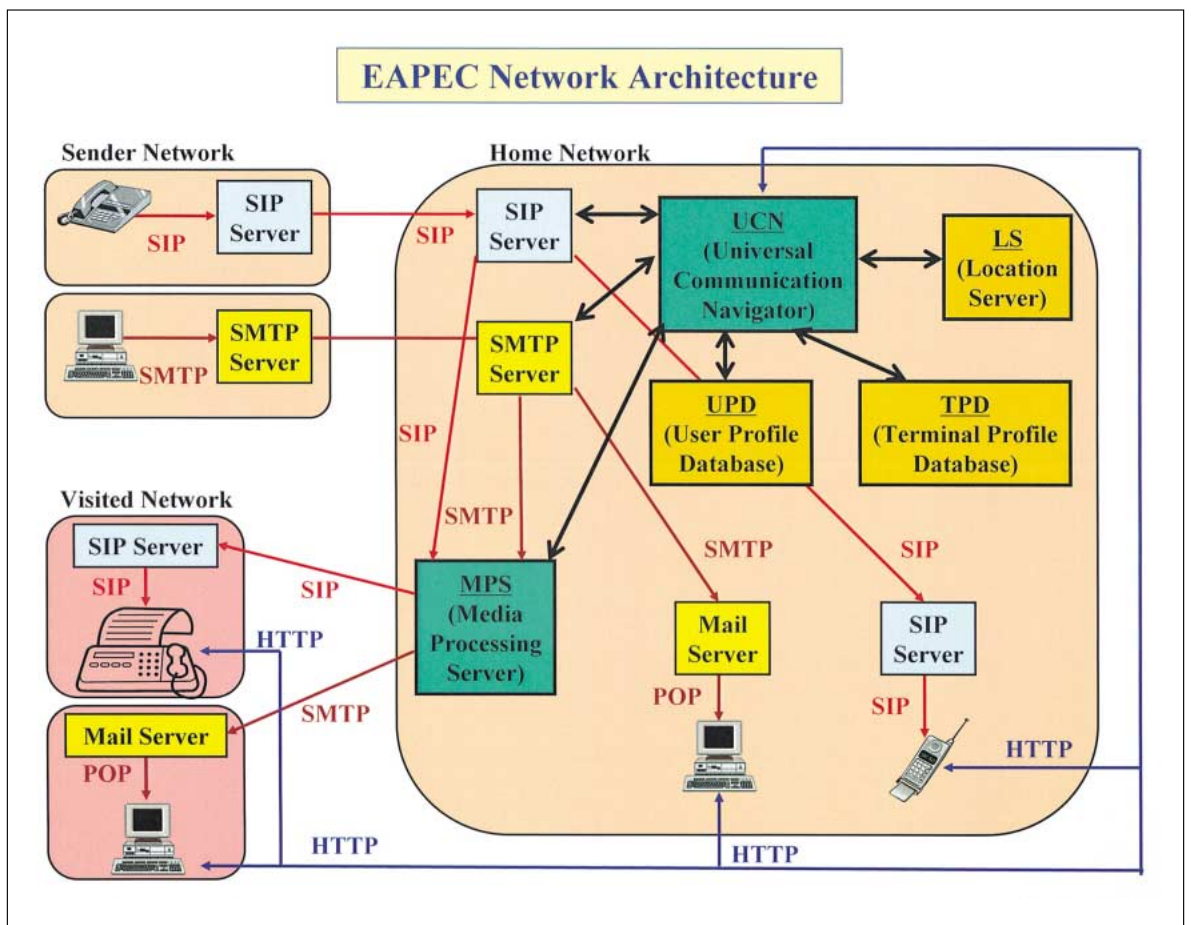
国立情報学研究所情報メディア研究系助手。現在の専門分野は、ユビキタスコンピューティング・ネットワーク、コンテキストウェア・コンピューティング。

本講演では、ユビキタスコンピューティング環境においてパーソナル通信を実用化するためのアプローチとして、「環境適応型パーソナル通信システム (EAPEC: Environment-Adaptive Personal Communications System)」を紹介した。EAPECは、時々刻々変化するユーザの通信環境を自動的に取得し、その情報をもとに受信者がメッセージを受信するために最適な通信端末と通信サービス/メディアを自動的に

近年、携帯電話やPDA (Personal Digital Assistants) をはじめとするパーソナル・モバイル通信技術の著しい発展に伴い、学術分野および産業界においてユビキタスコンピューティング・ネットワークへの関心が急速に高まってきている。ユビキタスコンピューティングはその語が示すようにコンピュータの「遍在性 (ubiquity)」を意味するが、もうひとつの重要な概念としてコンピュータの「不可視性 (invisibility)」がある。これは、ユーザがごく自然にコンピュータを利用し、コンピュータがユーザの日常生活に溶け込み、そして、最終的にコンピュータがユーザの意識から見え失せることを意味する。

選択し、それに合わせた通信サービスや通信メディアの自動変換を行うことによって、ユーザに通信端末の設定・操作に関するストレスを与えることなく確実に受信者へメッセージを到達させることを目的とした新しい通信システムである。

今後は、ユーザの通信環境だけでなく、ユーザの場所、時刻、行動、行動履歴などユーザを取り巻く環境に関するさまざまな情報 (ユーザコンテキスト) を自動的に取得し、それに基づいてユーザが必要とする情報あるいはユーザに有益な情報を提供する、「コンテキストウェア型情報提供システム」の研究に発展させていく予定である。



第7回環太平洋人工知能会議(PRICAI-02)

2002年8月18日から22日にかけて第7回環太平洋人工知能会議(PRICAI-02)が開催されました。この会議は人工知能の総合的な国際会議のシリーズでアジア太平洋地区を担う

のとして隔年ごとに開催されてきました。本年は人工知能学会主催、国立情報学研究所後援で学術総合センターで行われました。17カ国から約240人の研究者が集まり、約60件の研究



発表を行いました。招待講演ではアメリカ、オーストラリア、ドイツ、日本の著名な教授が人工知能の方向性について講演を行いました。それぞれ、携帯やマルチメディア、感性といった新しい分野に人工知能技術が利用される可能性が大きいことを示しました。また、5つの個別ワークショップも開かれ、エージェントや知識発見についての討議や発表が行われました。

(知能システム研究系知識処理研究部門
助教授 武田英明)

Computerm 2002 : The 2nd International Workshop on Computational Terminologyの開催

計算言語学分野の最大国際会議COLINGの併設ワークショップとして、2002年8月30日、第2回計算専門用語学ワークショップ(Computerm 2002 : The 2nd International Workshop on Computational Terminology)が、台北(台湾)で開催された。主催者は、国立情報学研究所の影浦峽助教授、フランス・ナント大学計算機科学研究所のベアリス・ダイコ教授、台湾中央研究院(Academia Sinica)のリーフェン・チェン教授、東京大学情報基盤センターの中川裕志教授の4名。

約10件の発表を想定した1日のみの小規模なワークショップとして組織されたが、投稿論文数が多かったために、採択率は50%以下となった。採択論文は、多言語に関するものが3件、専門用語とバリエーション抽出が2件、専門語彙の構造化が2件、複合専門用語解析が2件、応用が2件の合計11件となった。全てのセッションで25名から35名の参加者があり、

活発な質疑応答が行われた。最後の討論では、計算専門用語学の領域を巡る議論とワークショップの今後のあり方が議論され、本ワークショップ第3回へと続けていくことが合意された。

(人間・社会情報研究系情報管理学研究部門
助教授 影浦峽)



抽出・バリエーション・セッションの
発表光景

■ 総合研究大学院大学数物科学研究科情報学専攻紹介

国立情報学研究所では、平成14年4月から、総合研究大学院大学に参加し、同大学の数物科学研究科博士課程に「情報学専攻」を開設しました。この「情報学専攻」は、「情報基盤科学」、「ソフトウェア科学」、「知能システム科学」及び「情報環境科学」の4つの教育・研究指導分野から成り立っています。NII Newsでは、今回から4回シリーズで、各分野の紹介を行うことにしました。第1回である今回は、「情報基盤科学」について、です。

その1 情報基盤科学

現代の情報システムは情報数学と情報通信ネットワーク基盤によって支えられており、情報基盤科学の分野では、それらを理論と実証の両面から総合的に大学院生の教育並びに研究の指導を行っています。

まず、教育に関しては、情報基盤科学の理論的基礎を概説する情報基盤科学概論の他、情報数学関係の講義として数理情報学、数理論理学、情報論理学、アルゴリズムの各講義を、また、情報通信ネットワーク基盤関係の講義として情報通信工学、情報通信ネットワーク、通信プロトコル、高機能ネットワークの各講義を用意しています。

また、研究指導面に関しては、これらの講義科目に対応する最新の研究テーマとして、例えば下記のようなテーマを揃え、指導体制を整えました。

情報数学関係では、数値計算の理論と応用(数値線型代数:大規模連立一次方程式・固有値問題・最小二乗問題の反復解法、逆問題解法、偏微分方程式の数値解法など)、離散アルゴリズムの基礎概念(組み合わせ最適化問題などに現れる基礎的アルゴリズムの計算量の削減と一般的な問題への拡張、実際のシステムへの効果的な適用法)、数理論理学を応用した計算機科学の基礎理論(型理論、構成的論理、プログラム理論)、計算理論(ロジックの手法を用いた計算や証明の複雑さの理論、およびその自動定理証明への応用)など。

情報通信ネットワーク基盤関係では、第4世代移動通信の技術とサービス、デジタル放送時代のサーバ形テレビジョン、高度道路交通システムの技術とサービス、家庭の情報化と情報家電、通信機器のインタオペラビリティ、情報通信工学、放送工学の最先端の研究課題、無数のコンピュータが人間の周りを取り巻き、人間の社会活動を

支えるユビキタス及びコンテキスト・ウェア・コンピューティング・ネットワーク、高度サービスを効率良く実行するネットワーク統合システムの構成法と制御技術、マルチメディア通信トラヒック特性の把握と、その制御方法、次世代光通信アーキテクチャに関わるルーティングや制御などの次世代情報通信における諸問題の解決など。

現在、情報基盤科学分野には、平成14年度入学の3名の博士課程の学生が入学し、講義や研究のための打合わせに出席しながら、博士号取得に向けた新しい一歩を踏み出しています。また、本年10月からは、情報基盤科学分野に外国人留学生3名を含む4名が新たに入学しました。

なお、現在、平成15年度の情報学専攻博士課程入学生を募集中ですので、ご興味のある方は、是非、下記の情報ページをご覧ください。

総合研究大学院大学・数物科学研究科・情報学専攻ホームページ

URL: <http://www.nii.ac.jp/daigakuin/index.html>

(情報学基礎研究系情報数理研究部門教授 速水 謙)

(情報基盤研究系高機能ネットワーク研究部門教授 山田茂樹)



研究指導風景

HOT NEWS
1

汎用連想計算エンジンGETAの公開開始

本誌第6号(平成13年9月発行)で紹介した「汎用連想計算エンジンGETA」の公開を開始しました。詳細についてはホームページでご案内しています。 URL: <http://geta.ex.nii.ac.jp/>

【問合せ】 高野明彦 ソフトウェア研究系教授 E-mail: aki@nii.ac.jp

総合研究大学院大学国際大学院コース(情報学専攻)に 入学者6名

総合研究大学院大学では、外国人留学生に対する特別コースとして、10月から英語での講義などによって、標準修業年限内に大学院博士後期課程を修了させる国際大学院コースを設置しました。それに伴い、本研究所が基盤組織となっている同大学数物科学研究科情報学専攻でも、日本人学生とともに国際的な雰囲気のもとで教育を行い、学術研究の新しい流れに対応できる幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者の養成を目的に、アジアを中心とした諸外国からの優秀な留学生を募集したところであります。

このたび、以下の6名を国際大学院コースに迎え入れました。



氏名	国籍	出身大学名	備考
Pattara Kiatischevi	タイ	University of Stuttgart	文部科学省国費留学生
Pen Kimveasna	フランス	Ecole Polytechnique de Nantes	文部科学省国費留学生
Tang Bihua	中国	The University of Electronic Science and Technology, China	
Li Lei	中国	University of Science and Technology of China	
Jumpot Phuritakul	タイ	Asian Institute of Technology	
Tuangthong Wattarujeekrit	タイ	Kasetsart University	

(研究協力課)

HOT NEWS 2 Webcat Plusのサービス開始



国立情報学研究所では、今年度から公開しているGeNii(ジーニイ:NII学術コンテンツ・ポータル)の新たな機能として、Webcat Plus(NII図書情報ナビゲータ)のサービスを、平成14年10月から開始します。

本研究所のWebcatサービスは、全国の大学図書館等が所蔵する図書・雑誌を検索できるサイトとして、非常に多くの方々に利用されていますが、Webcat Plusは、図書の検索機能を大幅に強化し、使い勝手を向上させた新しいタイプのサービスです。

Webcat Plusは、以下のような特徴もっています。

漠然としたテーマからでも適切な図書を見つける手助けをする「連想検索機能」を備えています。

図書の目次や帯・カバー等に書かれた内容情報を見ることができます。(1986年発行分から)

Webcat同様、大学図書館等の所蔵情報を見ることができます。

当分の間、Webcatとは並行してサービスを行います。また、当面は日本語の図書を対象としますが、将来的には海外の図書情報の収録も検討しています。

どなたでも無料で利用できるサービスとして、今後も、各種条件によるソート表示機能、自分の書棚を作れるパーソナライズ機能など、拡充を続けていきますので、ご期待ください。

Webcat Plus URL : <http://webcatplus.nii.ac.jp/>

(アプリケーション課)

■ドイツでの目録システム講習会開催

目録所在情報サービスは、国内のみならず、欧州各国や中国など、国外の学術研究機関でも利用されています。本研究所では、これらの海外の参加機関を対象とした「目録システム講習会」を随時開催してきました。

今回、昨年のケルンに引き続き(NII News No.8参照)ドイツ及びスイスの目録所在情報サービス参加機関等を対象として、平成14年7月22日～26日に、ミュンヘン大学東アジア研究所日本文学、日本資料図書館連絡会及び国際交流基金との共催で、ミュンヘン大学及びバイエルン科学アカデミーのライプニッツ計算機センターを会場として「目録システム講習会」を開催しました。



実習風景

本講習会は、カリキュラムを初級コース(3日間)及び上級コース(2日間)に分けて、国内開催と同等の内容を実施しました。受講者は熱心に取り組み、13機関20名の方が修了されました。

また、昨年同様、NACSIS-CATに入力したデータを各図書館でのOPACとして利用できるSPCATサービスについても、ドイツ参加機関の所蔵分を例として、画面構成や検索方法などを紹介しました。

(成果普及課)



研修参加者との記念撮影

■「情報セキュリティ担当職員研修」及び「情報セキュリティポリシー入門講座」について

前々号(NII News No.10)でもご紹介していますが、平成14年度より標記の2つの研修事業を新たに実施していますので、その概要をお知らせします。

【情報セキュリティ担当職員研修】

平成12年及び13年度に実施した「ネットワーク・セキュリティ研修(試行)」での評価をもとに、主にネットワーク管理の業務担当者を対象とした、実習を中心としたカリキュラムに再構築しました。セキュリティポリシーの策定や運用例についての講義も行っています。

【情報セキュリティポリシー入門講座】

各機関における情報セキュリティ対策の推進及びセキュリティポリシーの策定・運用に対するさらなる意識向上を目的として、全国6ヶ所の会場(日程・会場は下表参照)にて、主にセキュリティ責任者やシステム管理責任者を対象に開催いたします。「大学における情報セキュリティポリシーの考え方」(NII News No.10参照)を基に、セキュリティポリシーの概要や最新動向、各機関における事例報告等について、講演を行います。

【情報セキュリティポリシー入門講座 開催予定】

開催会場	共催機関	開催日時	定員
北海道大学学術交流会館	北海道大学大型計算機センター	平成14年11月8日(金) 13:30-16:30	208名
厚生年金ハートピア山形	TOPIC(東北学術研究インターネットコミュニティ)	平成14年11月6日(水) 13:30-16:30	50名
一橋記念講堂		平成14年12月2日(月) 13:30-16:30	500名
名古屋大学シンポジオン	名古屋大学情報連携基盤センター	平成14年9月25日(水) 13:30-16:30	200名
大阪大学銀杏会館	大阪大学サイバーメディアセンター	平成14年12月16日(月) 13:30-16:30	200名
九州大学附属図書館視聴覚ホール	九州大学情報基盤センター	平成14年11月8日(金) 13:30-16:30	200名

それぞれの詳細(プログラム・参加申込等)については、次のホームページをご覧ください。

URL: <http://www.nii.ac.jp/hrd/>

(成果普及課)

■平成14年度 軽井沢土曜懇話会(7月27日・9月7日)

軽井沢の国際高等セミナーハウスにおいて7月27日(土)および9月7日(土)に平成14年度軽井沢土曜懇話会の第4回・第5回をそれぞれ開催しました。その講演の様子を紹介します。また、これらの講演はエルネットと国立情報学研究所のホームページで公開する予定です。

(成果普及課)

第4回：7月27日(土)「映像メディアが拓く新しい情報通信の世界」

国立情報学研究所副所長

坂内 正夫

(さかうち まさお)

本年7月1日付けで国立情報学研究所副所長として就任した坂内正夫が映像メディアを用いた情報システムを紹介し、今後の情報通信技術の方向性について、情報システムの専門家としての視点から話をしました。

「いわゆる「ITバブルの崩壊」後、情報通信技術が社会、経済の発展に本当に貢献できるのかが問われている。本講演では、カメラ映像やテレビ映像をもとに、人と社会に実価値を生むことのできる新しい情報システムについて考える。映像認識技術を用いた安全な道路交通、社会生活の為の情報システム、文化財保護の為の情報システム、通信と放送を融合する映像の情報システム等の実例を挙げ、情報通信技術のあるべき方向性を探る。」 (当日配布資料より)



第5回：9月7日(土)「人づくり 新世紀日本の本質的課題」

富士ゼロックス株式会社代表取締役会長

小林 陽太郎氏

(こばやし ようたろう)

科学技術・学術審議会委員や学術研究フォーラムの幹事も務めるなど、各方面で活躍をされている小林陽太郎氏より、これからの日本の教育問題について以下のようなお話をいただきました。

「企業経営、政治、経済、国際関係・・・グローバル化が進む世界において顕在化する様々な問題も、突き詰めれば、「個」の在り方、律し方といった根源的問題に行きつく。新時代に相応しい「個」の在り方とは何なのか。そうした「個」を育む教育とはどうあるべきなのか。教育問題について、幅広い視点から考える。」 (当日配布資料より)



なお、今回の講演は初めての試みとして、インターネットでのライブ中継を行いました。当日、会場に来られなかった方にも土曜懇話会に参加していただくことができ、大変好評でした。今後も随時行っていく予定で、詳細はホームページでご案内いたします。

■ 山本喜久客員教授による特別講義 「量子コンピューティングの基礎」

8月5日(月) 学術総合センター12階会議室において、本研究所実証研究センターバーチャルライブラリー研究室の山本喜久客員教授による大学院生向けの特別講義が行われました。

山本喜久教授は、NTTのR&Dフェロー、スタンフォード大学応用物理学科・電気学科の教授及びJSTの量子もつれ国際共同研究プロジェクトの代表研究者でもあります。先生の主な



講義風景

研究分野としては、光増幅、コヒーレント伝送、非古典光、量子非破壊測定、共振器量子電磁気学、メソスコピック輸送現象、量子情報処理などがあげられます。

講義のテーマは「量子コンピューティングの基礎」で、午後1時30分から約3時間行われ、当日は、大学院生にとって

は夏休み期間中にもかかわらず、本研究所の情報学専攻の大学院生はもとより、東京大学、東京工業大学、千葉大学、東京理科大学、青山学院大学などの国・私立の大学院生、また、企業の研究者の方々も含め、61名もの聴講者がありました。講義終了後も、盛んに質疑応答が行われ、たいへん有意義な講義であったとの声が多く寄せられました。

(研究協力課)



山本喜久客員教授

■ 名誉教授の称号授与

内藤衛亮先生(現東洋大学社会学部教授)に当研究所名誉教授の称号が授与されました。内藤先生は昭和59年4月東京大学文献情報センター(学術情報センターの前身)助教授、昭和61年4月学術情報センター助教授、昭和62年4月教授、同年から同センター運営協議員を務められ、続いて平成6年7月より同センター学術情報研究系研究主幹に就任されました。学術情報センター創設以来、図書館学、情報管理学などの分



野において国内、国外に向けて発信し、周知と意見調整に努められ、また、同センターの調査・研究活動の発展に尽くされ、その功績は極めて大きいものです。平成12年4月には国立情報学研究所創設に伴い人間・社会情報研究系教授及び研究主幹に就任され、当研究所の発展と人文社会を含む情報学の総合的な研究領域の拡大に御尽力いただきました。

(総務課)



7月19日に行われた名誉教授称号授与式にて(前列右が内藤先生)

■ 受賞

奈良高明情報学基礎研究系助手が計測自動制御学会 Young Author's Awardを受賞

奈良高明情報学基礎研究系情報数理研究部門助手が、8月7日の計測自動制御学会 SICE Annual Conference 2002 において Young Author's Awardを受賞しました。受賞対

象論文は「Projection Method for the Inverse Source Problem of the Poisson Equation」です。

お知らせ

平成14年度軽井沢土曜懇話会

国際高等セミナーハウス(長野県軽井沢町)を会場に開催します。

平成14年10月26日(土) 佐藤 禎一 氏(日本学術振興会理事、元文部事務次官)

平成15年 3月15日(土) 辻井 重男 氏(中央大学教授、東京工業大学名誉教授)

参加申込など詳細は成果普及課ホームページ URL <http://www.nii.ac.jp/hrd/> でご案内しています。

平成14年度国立情報学研究所公開講演会

「高度情報化社会の未来学 - 市民・大学・社会のあり方、変わり方」をテーマに開催します。

東京会場：平成14年10月28日(月) 学術総合センター一橋記念講堂(東京都千代田区一ツ橋)

大阪会場：平成14年11月26日(火) 大阪国際会議場(大阪府大阪市北区中之島)

参加は無料です。

プログラム、申込み方法等の詳細についてはホームページ URL <http://www.nii.ac.jp/hrd/> でお知らせします。

第5回日本バーチャルリアリティ学会サイバースペースと仮想都市シンポジウム

平成14年12月2日(月) 学術総合センター 中会議場(東京都千代田区一ツ橋)

詳細についてはホームページ URL <http://welcome.to/sigcs/> でお知らせします。

【問い合わせ】井上智雄 知能システム研究系助手 E-mail: inoue@nii.ac.jp

NII定例研究会

国立情報学研究所では、情報学研究に関心のある研究者・技術者の交流の場として、「NII定例研究会」を企画・運営しています。「NII定例研究会」は、月に1回定期的で開催しており、研究所内外の研究者による研究発表等を行っています。開かれた研究機関として外部にも公開しており、幅広い方々の参加を歓迎しています。

今後の開催予定は次のとおりです。

第23回：平成14年 11月20日(水) 15:00～17:00 学術総合センター12階 会議室

第24回：平成14年 12月18日(水) 15:00～17:00 学術総合センター12階 会議室

第25回：平成15年 1月15日(水) 15:00～17:00 学術総合センター12階 会議室

第26回：平成15年 2月19日(水) 15:00～17:00 学術総合センター12階 会議室

第27回：平成15年 3月19日(水) 15:00～17:00 学術総合センター12階 会議室

プログラムの詳細はホームページ URL <http://research.nii.ac.jp/teirei/> でお知らせします。参加は無料です。

【問い合わせ】NII定例研究会 企画グループ

情報学研究に関心をお持ちの皆様の参加をお待ちしています。

総合研究大学院大学情報学専攻(博士後期課程)学生募集日程

【平成15年4月入学】

募集人数：6名

出願期間：平成14年12月 9日(月)～13日(金)

選抜期日：平成15年 2月 3日(月)～2月7日(金)のうち1日

合格発表：平成15年 2月下旬

入学手続：平成15年 3月10日(月)～14日(金)

募集要項の詳細についてはホームページ

URL <http://www.nii.ac.jp/daigakuin/index.html> でお知らせしています。



国立情報学研究所の研究・事業活動について詳しくはホームページもご覧ください。
<http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

NII NII News
国立情報学研究所ニュース 第12号
平成14年10月 / 発行 国立情報学研究所
National Institute of Informatics

NII News に関するお問い合わせは国際・研究協力部広報調査課まで
〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2 学術総合センター
TEL: 03-4212-2132 E-mail: kouhou@nii.ac.jp